

卒前教育としての「検査説明・相談ができる臨床検査技師」 育成の取り組み

水 上 紀美江*1[§] 三 浦 芳 典*2 渡 辺 聡*1
平 井 かをり*1 高 橋 裕 治*1 吉 川 健 太*1
内 堀 毅*1 今 中 正 浩*1 稲 福 全 人*1

[要 旨] 平成 26 年度から日本臨床衛生検査技師会による「検査説明・相談ができる臨床検査技師育成講習会」が進められている。この取り組みは既卒の臨床検査技師が対象ではあるが、臨地実習前の本学 3 年生にこの講習会の一部を授業に取り入れ教育的効果を検証した。

授業終了後にアンケートを取ったところ、実際に検査説明・相談ができるようになるためには豊富な知識やコミュニケーション能力が求められ、かなりハードルが高いと感じつつも機会があれば是非やってみたく前向きに捉えた学生が多くみられた。

卒前教育としてこの講義を取り入れたことは、臨床検査技師がチーム医療の一員としてどのような貢献ができるのかを学び、その中で貢献していく自分の姿を考えるにあたり、大いに参考になったと言える。さらに知識とコミュニケーション能力の重要性を実感でき、その後のモチベーションの維持、増加が期待され、非常に効果的な取り組みであったと考えた。

[キーワード] チーム医療、検査説明、検査相談、卒前教育

I. 目 的

平成 26 年度より日本臨床衛生検査技師会(以下、日臨技)による「検査説明・相談ができる臨床検査技師育成講習会」(以下、育成講習会)が進められている。この取り組みはチーム医療の一員として臨床検査技師が医療現場から求められる要求に応えるための取り組みの 1 つである。

既卒者が対象の取り組みではあるが、これから求められる臨床検査技師像を理解し、それに対して自分たちが目指す医療人の姿を今一度考えさせ

るため、この講習会の一部を授業に取り入れ、学生に対する教育的効果を検証したので報告する。

II. 対象および方法

対象は臨地実習前の本学 3 年生 67 名とした。

方法は日臨技企画の育成講習会の内容に準じた講義、症例検討、検査説明・相談のロールプレイ、総括を 3 時間の授業として実施し、学生の授業への取り組み姿勢および授業後のアンケート調査結果より、教育的効果を検証した。

授業は日臨技の育成講習会を開催している神奈

*1 湘央医学技術専門学校 臨床検査技術学科 § mizu@sho-oh.ac.jp

*2 北里大学病院 臨床検査部

川県の企画担当者を講師に招き行った。

講義では臨床検査技師がチーム医療の一員として今まで医療現場でどのような活動を行ってきたのか、検査説明・相談のできる臨床検査技師育成に取り組むに至った背景¹⁾や意義、さらに今後求められる臨床検査技師像は何か、ご自身の診察前検査結果説明での活動を含めた講義をして頂いた。

その内容には、さらなるチーム医療の推進が国から求められており、それに対して他の医療職種が具体的に活動している一方で、臨床検査技師のチーム医療への貢献が十分に評価されてはおらず、遅れをとっていた事実²⁾に危機感を持って日臨技が取り組んでいる状況も含まれていた。

次に模擬症例を用い、患者へどのような説明をすればよいか4~5人のグループに分かれ、学生同士で症例検討を10分間行った。症例は1型糖尿病女性の生化学データを時系列で表示しており、インスリン療法中であるが血糖コントロールが出来ておらず、さらに挙児希望の前提も設けた。

引き続き、学生の代表者が1人ずつ患者役、技師役、企画担当者が付添役となって検査の説明や相談をするロールプレイを10分間行い、全員が観察した。ロールプレイは患者を入室させるところから始まり、患者役の学生は技師役の学生に様々な疑問を投げかけ、それに技師役の学生が答

える方法で実施した。

ロールプレイ終了後、説明内容についての振り返り、生化学データの解説等、総括を行った。

この授業終了後に学生がどのように感じたか、記名で選択式のアンケートを実施した。

III. 結 果

学生の授業への取り組み姿勢では、チーム医療における臨床検査技師の現状についての講義は、ほとんどの学生が興味深く聞いていた(図1)。症例検討では設定状況や時系列の生化学データを事前配付し、あらかじめ、予習ができていたこともあり、学生間で活発に病態解析を行うことができた(図2)。しかしながら、データには状況に見合わない異常値が含まれていたことから、説明がつかない部分もあり、多くの疑問を感じていた。

代表者によるロールプレイでは患者役の学生から「この数字が高いと悪いのでしょうか?」、「どうしたらよいのでしょうか?」と絶妙な質問が続いた(図3)。しかし、経験のない学生は言葉に詰まり説明ができなくなり、側にいる教員に助けを求める状況が多く見られた。

授業終了後に実施したアンケート結果を表に示した。アンケートの回収率は100%で無効回答はなかった。



図1 講義中の様子



図2 症例検討中の様子

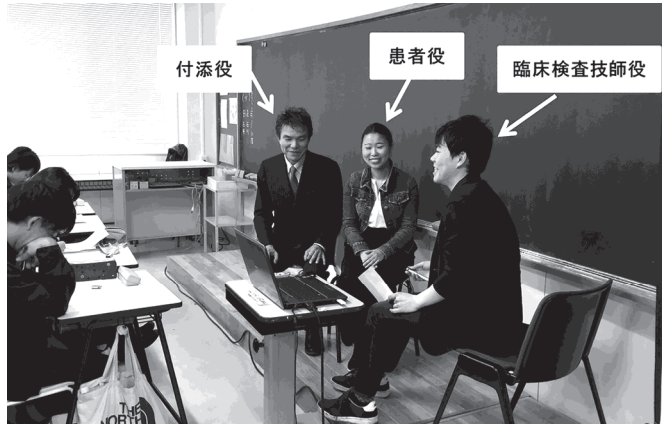


図3 ロールプレイ中の様子

患者役と付添役が質問をし、臨床検査技師役が答えている様子

表 検査説明・相談ができる臨床検査技師の育成について：授業アンケートと結果(%)

国からさらに求められている臨床検査技師の役割とそれに対して現在、どのような活動をしているか知っていましたか？		
ア	今回の講義で初めて知った	74.6
イ	なんとなく知っていた	22.4
ウ	知っていた	3.0
現在の臨床検査技師の現状についてどう感じましたか？*複数回答可		
ア	臨床検査技師業界の危機感	34.3
イ	今後は検査をするだけではだめだと認識した	77.6
ウ	検査以外にもたくさんの業務があると認識した	62.7
エ	自分もチーム医療に率先して参加したいと思う	53.7
オ	自分には関係ないと思う	0.0
カ	できれば検査だけをやっていきたい	3.0
キ	その他(自由記載)	0.0
検査説明・相談ができる臨床検査技師の話やディスカッションをやってみて感じたことを教えてください。*複数回答可		
ア	データを読み解くのが難しかった	73.1
イ	病態を推測するのが楽しいと感じた	53.7
ウ	データが分かるにはもっと知識が必要だと思った	83.6
エ	想定外のことが隠されている場合があると知った	70.1
オ	言葉づかいやコミュニケーション能力が必須と感じた	73.1
カ	あまり興味を抱かなかった	0.0
キ	その他(自由記載)	0.0
将来、検査説明・相談を担当する業務もやってみたいと思いますか？		
ア	是非やりたい	58.2
イ	できればやりたくない	13.4
ウ	絶対やりたくない	1.5
エ	どちらとも言えない	25.4
オ	その他(自由記載)	1.5

IV. 考 察

アンケートの結果から、「国からさらに求められている臨床検査技師の役割とそれに対して現在どのような活動をしているのかわかっていたか」の質問に対し、「今回の講義で初めて知った」と答えた学生が74.6%であった。3年次までに検査の知識や技術だけでなく患者とのコミュニケーションの重要性を学んではいるものの、具体的にチーム医療の一員として求められている臨床検査技師の役割や、現在どのような活動をしているかまで学生には理解できていないことが分かった。

しかしながら「現在の臨床検査技師の現状についてどう感じたか」の質問内容については、「今後は検査をするだけではだめだと認識した」と答えた学生は77.6%であった。また、「検査以外にも沢山の業務があると認識した」と答えた学生が62.7%、「自分もチーム医療に率先して参加したいと思う」と答えた学生も53.7%見られた。このことから、「正しい検査データを速やかに提供できる臨床検査技師」ということだけではこれからの医療現場では通用せず、チーム医療の推進に積極的に関わることが今後強く求められることを、この短い時間でも多くの学生が認識できたものと考えられる。

さらに他人事のように「自分には関係ないと思う」と答えた学生は0%で、全員が自分のこととして捉えることができていた。

続いて「検査説明・相談ができる臨床検査技師の話やディスカッションをやってみて感じたこと」の質問には、「あまり興味を抱けなかった」と答えた学生は0%で、非常に関心の持てた内容であったと考えられる。

しかし、「データを読み解くのが難しかった」と答えた学生が73.1%、「データが分かるにはもっと知識が必要だと思った」と答えた学生が83.6%と多く、実際に検査説明・相談ができるようになるためには豊富な知識が必要であると実感できたと考えられる。さらに、「想定外のことが隠されている場合があると知った」と答えた学生

が70.1%となったが、今回のこの症例の場合、本当はインスリンを打っていないなかったという事実が技師との相談中に判明した症例であった。このように患者とのコミュニケーションの中で初めて分かる、隠されていた事実が実は多くあり、「傾聴」する姿勢や、「開かれた質問」をするテクニックなど、高いコミュニケーション能力が求められると感じることができたと考えられる。これは「言葉づかいやコミュニケーション能力が必須と感じた」と73.1%の学生が答えたことにも通じているものと考えられる。

今回の取り組みから、説明ができない状況にも遭遇することや、患者の話や聴き、十分な医療サービスを提供することはとてもハードルが高いと感じつつも、「将来、検査説明・相談を担当する業務をやってみたいと思うか」の質問には「是非やりたい」と答えた学生が58.2%おり、「できればやりたくない」「絶対やりたくない」を合わせた14.9%と比べ、高い値を示した。このことから、チーム医療に貢献できることをやりがいとして前向きに捉える学生が多く、その能力を身につけていくためにも、その後の臨地実習に臨む姿勢や国家試験合格に向けたモチベーションの維持、増加にもつながることが期待できた。一方で、否定的に捉えた14.9%の学生には、大人しく、対人関係を苦手とする学生や、日頃から自己肯定感が低い学生が半数以上を占め、前向きに捉えられるかどうかは個人のキャラクターに依存する傾向が見られた。

検査説明・相談ができる臨床検査技師の育成は簡単にできることではない。ましてや臨床経験のない学生はなおさらである。しかしながら、今後、臨床検査技師になる自分たちに求められていく役割を知り、それに応えるようにするには何が必要かを考え、実践する意欲を持った学生を輩出することが卒前教育としての役割である。そのためにもアクティブラーニングやR-CPCの充実を心がけ、より多くの学生が知識を増やしコミュニケーション能力を養える環境を我々が提供できるようにしなければならないと考えた。

V. 結 語

卒前教育としてこの講義を取り入れたことは、今後の医療現場ではどのような臨床検査技師が求められ、チーム医療の一員としてどのような貢献ができるかを考えるきっかけとなった。

そして今後、それを担っていく学生達にはチーム医療の中で貢献していく自分の姿を考えるにあたり、大いに参考になったと言える。さらに検査

説明・相談が出来るようになるためには必要な知識を増やし、コミュニケーション能力を高める努力が必須であることが実感でき、非常に効果的な取り組みであったと考えた。

文 献

- 1) 萩原三千男. 検査説明・相談ができる臨床検査技師育成～日臨技としての取り組み～. 生物試料分析 2015; 38(2): 87-92.